

# ゆめほん 目次

カモナ・マイハウス 幸村精市.....	とーこ	5
濡れた唇 忍足謙也.....	羽奏	35
モンブランと弱虫おおかみ 亜久津仁.....	マナ	54
アプリコット 切原赤也.....	マリ	86
これは恋ではない 海堂薫.....	秀千代	102
嘘なんて、つけない 仁王雅治.....	侑	136
懲りない女 幸村精市 VS 忍足侑士.....	jade	162
桜の蕾 忍足侑士.....	水了	192
嫌よ駄目よも好きのうち？ 千歳千里.....	みぎり	213

## 序章

「ここにします」

即決だな、もつと良く見ろよという部屋のオーナーでありテニス部OBである先輩に、精市は誰をも魅了する笑みを見せた。

「いえ、こんなに良い部屋だとは思ってもみませんでした。暫く借り暮らしをするだけのつもりだったし」

「ああ、家の改装が終わってご家族が赴任から帰ってきたら戻るんだよな。でも俺も駐在の期間が終わるまで家に住んでくれるとありがたいんだ。ほら、家って誰も住まないと傷むって言うし。いやー、それにしても急な話でどうしようかと思ってたけど、助かったよ。俺は家をこのままにしていけるし、幸村もアパート借りたりしなくて良いしでちょうど良かったよな」

幸村は先輩の話を耳に入れながらも返事をせず、すっかり気に入った部屋を見回した。そこはお世辞ではなく、住みたいと思わせる素晴らしい部屋だった。

リビングとダイニング、キッチンが連なる広い部屋にはぐるりと大きな窓が囲んでおり、外には広々としたベランダが見えている。テラスのように椅子とテーブルが置いてあるが、植物の類は設置されていないようだ。緑の物は見えない。ここにガーデニングのあれこれを置けば……と早くも計画しながら、ベランダから差し込む光を浴びていると「なあ、冷蔵庫の中とかもそのまんまにしていけばいいよな？」という言葉に現実を引き戻された。

「ええ、勿論です先輩」

「じゃあ、いつでもいいから来てくれ。俺は三日後には出て行くから、早めに。そっちの部屋、今は開いてるから」

「いいんですか？」

「ああ、妹が帰ってくるのは二年半も後の話だからな。それまでに片づけておけば問題ないって」

幸村は先輩の妹であり、同級生であった彼女の顔を思い浮かべた。そして、彼女の部屋で自分が住むことになると思うたらどんな顔をするだろうと考え、笑みを浮かべた。留学中とはいえ、長期休暇の期間には帰ってくるかもしれない。

「彼女に連絡は、しておかなくて良いですか？」

「ああ、そういやお前と同級生だったよな。今度、俺が言っとくわ」  
そう言われると、彼女の連絡先も知らない幸村は何も答えようがなかった。

こうして、幸村は翌日からその家に移り住み、その二日後には一人で暮らし始めたのだった。

## 第一章

ああ、やつと帰ってきた……

私は半年ぶりに日本の地を踏み、その思いを嘔みしめた。疲れきった体をおして重いスーツケースをガラガラと運び、まっすぐに懐かしの我が家へと向かう。もうへとへとだった。でも、やつと自分の家の、自分のベッドで眠れるという事実は全てを許せる。留学先は確かに、伝統ある素晴らしい学園だった。でも人にはそれぞれ合う合わないという個別の感覚がある。残念なことに、留学先の寮暮らしは私には全く合わなかった。お風呂も浸かれず、トイレも冷た

い便座で、ご飯も美味しくなく……本当に辛かった。言葉も全然分らないし！

そう、私は留学期間を短縮して再び立海に編入する為に帰国したのだ。

ううん、今は学校の事なんて考えたくない。とにかくお風呂に入って眠りたい。日本式のバスと自分のベッド。それは夢にまで見た、想像するだけで垂涎もののアイテム達。待ってて！ 私は息を切らしながら、久しぶりの我が家のドアノブに鍵を差し込んだ。鍵を回すと、夢のように軽くカチャリと開いた。

「ただいまー」

誰も答えないと分かっている、そう言いたかった。しかし部屋に入ってあれ、と首を傾げた。電気がついていて。兄さんは出張に出かけたって聞いたのに、まだ行ってなかったのかな。どうやらお風呂に入っているようで脱衣場の奥から水音がしている。ちょうど良かった、お風呂のお湯そのままにしておこう。

そして私は何の疑問もなく、ごく普通に、お風呂場の扉を押しあげて「ただいま」を言おうとしたのだった。その言葉は発せられなかったけれど。

「……………」

「やあ、帰ってきたのかい」

「なっ、何してるの？ 誰よあんた！」

わたしは驚愕しながら、湯船に浸かっている兄とは似ても似つかぬ人物を見つめた。言ってるから気付いたけど、この人物はなんと！ 他の誰でもない、立海が誇るテニス部部长、神の子幸村精市だった！

「ふふ……少し見えない間に同級生を忘れるなんて随分薄情じやない

か」

「なんでここに居るの？ 呑気にお風呂になんか入っちゃって！」

「お兄さんに聞いていないのかい？」

「何を？ 兄さんは出張なんですよ？」

「頼まれてここに居るんだ」

そう言われてやっとな合点がいった。不遜な幸村と云えど、勝手に人んちが上がりでやっとなお風呂に入るわけはないよね、いくら何でも。普段かなりアレな態度を知っている私としては、とにかく幸村に出て行ってもらいたい。早く一人になりたいのだ。分かった、と一つ頷いて言葉を発した。

「留守番してくれてたわけね。でももう私が帰ってきたから大丈夫。すぐに自分の家に帰ってくれない？」

「何も聞いてないんだ……困ったな。俺がイチから説明しなきゃいけないのか」

「え？」

明らかに独り言を呟いた幸村は、問いかける私にニコリと天使のような笑みを向けた。

「話をする前に、お風呂から上がっていいかな？」

「あ……」

当然、湯船に浸かっている幸村は裸なわけで。白濁しているお湯のせいでくつきりとは見えないけど、ぼんやりと彼の身体のラインは分かる。急に、自分がノゾキをしているような恥ずかしい気分になってきた。それを見越したように、彼は追い打ちをかけた。

「俺だけ裸で、服を着た女の子に見下ろされるっていうのは好きじゃないな。逆だったらいいんだけど」